611.841.2:611.16

角膜輪部毛細血管に関する研究

第 2 報

高血圧症患者の角膜輪部毛細血管像について

岡山大学医学部第一内科教室(主任:小坂淳夫教授)

末 沢 泰 子

[昭和35年10月10日受稿]

目 次

- 1) 緒 言
- 2) 検査方法
- 3) 検査成績
 - i) 動脈脚巾
 - ii) 静脈脚巾
 - iii) 蹄係巾
 - iv) 歸係長
 - v) 血管の走行
 - vi) 局所的変化

緒 言

前報において健康者の角膜輪部毛細血管の観察成 績を報告し、これに依れば指爪根部皮膚毛細血管の 観察よりも数値の動揺が少なく、年令的変動が可成 り特異的に把握され、特に老化との関係について検 討の余地があることを指摘した。

又角膜輪部毛細血管は内頸動脈より分岐した血管 分枝であるため、脳内血管乃至眼底血管との関係も 可成り密接と推定される。

そこで本報では高血圧症,就中本態性高血圧症例 の角膜輪部毛細血管の観察を行ない,本血管像の臨 床的意義につき検討を加えた。

被検例並びに検査方法

1) 被検例

事業場及び市町村で行なつた成人病検診を受診したもののうち、本態性高血圧症と診断されたもの(最高血圧 150 mmHg 以上、最低血圧 90 mmHg 以上のもの)で他に合併症がなく、又前眼部、特に角膜、結膜に異常のないもの 191 例を選んだ。その年令分布は表1の通りである。

- vii) 血流状態
- viii) 血流速度
- ix) 流血中の顆粒
- x) 血液の充虚
- xi) 眼底所見との比較
- vii) 季節的変化の及ぼす影響
- 4) 総括並びに考按
- 5) 結 論

表1 年 令 分 布

		~29	30~39	40~49	50~59	60~69	70~
人	数	2	4	20	48	43	74
9	6	1.0	2.1	10.5	25.1	22.7	39.1

2) 検査方法

角膜輪部毛細血管の観察は第1報と全く同じ方法 を選んだ、尚、被検部位、検査術式、検査時の室温、 その他の条件についても第1報と同様に行なった。

次に血圧測定は15分静臥後,右側肘静窩で測定し, 測定には MARS の水銀血圧計を使用した。

又高血圧症例を最高血圧 150 mmHg から 169 mmHg のものを I 群, 170 mmHg から 189 mmHg のものを II 群, 190 mmHg から 209 mmHg のものを II 群, 210 mmHg 以上のものを IV 群とする 4 群に分類して観察した。

検査成績

1) 動脈脚巾

 3μ 迄のものが74例(38.7%)、 4μ から 5μ のものが95例(49.7%)、 6μ から 7μ のもの21例(11.1%)、 8μ 以上のもの1例(0.5%)を認めた。

又これを年令的にみると、6~7µのものは30才代、40才代、50才代、60才代、70才以上と年令の進むに従って50.0%、38.9%、19.6%、2.3%、2.7%と漸次減少し、3µ迄のものは逆に25.0%、16.7%、19.6%、60.5%、44.6%と次第に増加する傾向がみられた。

(表2)

次に最高血圧との関係では $I \sim II$ 群では、 $4 \sim 5 \mu$ のものがその大半を占め(56.3%, 53.2%)ているが、II 群では 3μ 迄のもの61.5%, 62.5% と更に狭小なものがその大半を占めている。(53)

	年 令	~	29	30-	~39	40	~49	50-	~59	60	~69	70)~
	人数	2	(%)	4	(%)	18	(%)	46	(%)	43	(%)	74	(%)
動	~ 3	0	0.0	1	25.0	3	16.7	9	19.6	26	60.5	33	44.6
脈	4~5	2	100	1	25.0	8	44.4	28	60.9	16	37.2	38	51.4
脈脚	6~7	0	0.0	2	50.0	7	38.9	9	19.6	1	2.3	2	2.7
巾	8 ~	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	1	1.4

表 2 動脈脚巾と年令との関係

表 3 動脈脚巾と最高血圧との関係

	血 圧	150	群 ~169 nHg	170	群 ~189 Hg	190	群 ~209 Hg	21	群 0~ Hg		t	E.	常
	μ	例数	%	例数	%	例数	%	例数	96	例数	%	例数	%
動	~ 3	25	26.6	18	38.0	16	61.5	15	62.5	74	38.7	0	0.0
脈	4~5	53	56.3	25	53.2	8	30.8	9	37.5	95	49.7	37	13.1
脚	6~7	16	17.0	3	6.3	2	7.7	0	0.0	21	11.0	236	81.4
ф	8~	0	0.0	1	2.1	0	0.0	0	0.0	1	0.5	16	5.5

又最低血圧との関係では最高血圧 $170 \, \mathrm{mmHg}$ 以上のもので最低血圧 $90 \, \mathrm{mmHg}$ 以下のもの16例と最低血圧 $110 \, \mathrm{mmHg}$ 以上のもの21例について観察したが、 $3 \, \mu$ 迄のものは $62.5 \, \%$ と、 $59.1 \, \%$ 、 $4 \sim 5 \, \mu$ のものは $37.5 \, \%$ 、 $40.9 \, \%$ 、 $6 \sim 7 \, \mu$ のものはいずれも認められず、両者類似した結果を得た、(表10)

2) 静脈脚巾

 7μ 迄のもの33例(19.3%)、 $8\sim10\mu$ のもの83例(52.0%)、 $11\sim12\mu$ のもの18例(10.5%)、 $13\sim15\mu$ のもの21例(11.7%)、 16μ 以上のもの10例(6.4%)であり、 $8\sim10\mu$ のものが大半を占めている。

年令的にこれをみると、11~15 µ のものは30才 代、40才代、50才代、60才代、70才以上と年令の進む につれて漸次25.0%, 32.9%, 42.5%, 5.1%, 10.1% と減少し、特に60才以上の高令者になると $11\sim15\mu$ のものは激減している。 $8\sim10\mu$ のもの,又 7μ 迄のものは50.0%, 41.2%, 55.0%, 89.8%, 81.1% と高令になる程増加している。(表 4)

又最高血圧との関係では $11\sim15\mu$ のものは最高血圧の高くなるに従って32.9%, 20.9%, 8.6%, 0.0%, と漸次減少し, 7μ 迄のもの及び $8\sim10\mu$ のものは逆に62.5%, 69.8%, 71.3%, 88.9%と次第に増加する傾向にあった、(表5)

次に最低血圧との関係については最高血圧 170 mmHg 以上,最低血圧 90 mmHg 以下のものと 110 mmHg 以上のものに別けて観察すると,後者

表 4 靜脈脚巾と年令との関係 二心。

	年 令	~	·29	30	~39	40	~49	50-	~59	60	~69	70)~
	人数	2	(%)	4	(%)	17	(%)	40	(%)	39	(%)	69	(%)
靜	~ 7	0	0.0	0	0.0	1	5.9	4	10.0	15	38.5	13	18.8
	8~10	0	0.0	2	50.0	6	35.3	18	45.0	2 0	51.3	43	62.3
脈	11~12	1	50.0	1	25.0	5	29.4	7	17.5	0	0.0	4	5.8
脚	13~15	1	50.0	0	0.0	4	23.5	10	25.0	2	5.1	3	4.3
巾	16~	0	0.0	1	25.0	1	5.9	1	2.5	2	5.1	6	8.7

	血圧		群 ~169 ·Hg	170~	群 ~189 Hg	190~	群 ~209 Hg	210	/群 0~ Hg	Ė	H	正	常
<u></u>	μ	例数	%	例数	96	例数	%	例数	%	例数	%	例数	%
靜脈脚中	~ 7 8~10 11~12 13~15	12 43 14 15	13.6 48.9 15.9 17.0	4 26 4 5	9.3 60.5 9.3 11.6	10 11 1	43.5 47.8 4.3 4.3	7 9 0 0	38.9 50.0 0.0 0.0	33 89 19 21	19.3 52.0 10.5 11.7	0 21 54 202	0.0 8.9 18.5 69.1
ιţι	16~	4	4.5	4	9.3	0	0.0	2	11.1	10	6.5	12	4.1

靜脈脚山と最高血圧との関係 表 5

に 7μ 迄のものと、8~10μ の狭小なものが僅に 多い. (表10)

3) 蹄係巾

30μ 迄のもの30例 (17.5%), 31~60μのもの123 例 (71.9%), 61~80 μ のもの16 例 (9.4%), 81 μ 以上のもの2例 (1.1%) を占め 31~60μのもの

が大多数を占めていた。

次に歸係巾と年令との関係について検討したが有 意の差は認められなかつた. (但し40才代で 30μ迄 のものが66.7%にみられた.)

次に最高血圧との関係につき検討したが、有意の 差は認められなかつた. (表6,7)

表	6	辮	係	ф	٤	年	令	بح	Ø	関	倸	

	年 令	~	·29	30~	~39	40	~49	50-	~59	60-	~69	70	o~
	人数	2	(%)	5	(%)	18	(%)	39	(%)	39	(%)	68	(%)
蹄	~30	1	50.0	1	20.0	12	66.7	6	15.4	8	20.5	12	17.6
126	31~60	1	50.0	4	80.0	3	16.7	29	74.5	29	74.4	47	69.1
係	61∼80	0	0.0	0	0.0	2	11.1	4	10.3	2	5.1	8	11.8
τħ	81~	0	0.0	0	0.0	1	5.5	0	0.0	0	0.0	1	1.5

表 7 蹄係巾と最高血圧との関係

	血 圧	150~ mm			群 ~189 Hg		群 ~209 Hg	210	群)~ ·Hg	THE STATE OF THE S	†	正	常
	μ	例数	%	例数	96	例数	96	例数	96	例数	%	例数	96
蹄	~30	11	12.5	10	23.3	3	13.0	6	33.3	30	17.5	26	11.7
127	31~60	66	75.0	3 0	69.8	16	69.6	11	61.1	123	71.9	166	74.7
係	61~80	9	10.2	3	6.9	3	13.0	1	5.6	16	9.4	29	13.0
ф	81~	2	2.3	0	0.0	0	0.0	0	0.0	2	1.1	1	0.6

4) 蹄係長

150 μ 迄のもの33例 (21.6%), 151~300 μ のもの

で 151~300μ のものが最も多い。

これを年令的にみたが有意の差は認められなかつ 134例 (79.5%), 301 μ 以上のもの5例 (2.9%) たが,40才代で僅かに 150 μ 迄のものが多い。(表8)

表 8 蹄係長と年令との関係

	年 令	~	29	30-	~39	40-	~49	50-	~59	60-	~69	70)~
_	人数	2	(%)	5	(%)	18	(%)	40	(%)	39	(%)	68	(%)
蹄	~150	1	50.0	1	20.0	7	38.9	6	15.0	7	17.9	11	16.2
係	151~300	1	50.0	4	80.0	11	61.1	34	85.0	29	74.4	55	80.9
長	301~	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	3	7.7	2	2.9

次に最高血圧との関係では有意の差異を認めなかった. (表9)

5) 血管の走行

大多数が直行していたが、18例に蛇行を認めた。 (表11)

最高血圧との関係では特異な所見は得られず,蔓 状行を呈するもの等も全く認められなかつた。又最 低血圧との関係では表10の如く最高血圧 170 mmHg 以上で最低血圧 90 mmHg 以下のものと,110 mmHg 以上のものとにつき検討した結果,最低血圧の高い 110 mmHg 以上の群に4例 (18.2%) 蛇行を認め, 90 mmHg 以下の群には全く認めなかつた。

6) 局所的変化

(i) 動脈の部分的狭小

8例 (4.2%) に認められたに過ぎない. 最高血圧との関係では全く有意の差異を認めなかつた. (表12)

表 9 蹄係長と最高血圧との関係

	血圧	150~	群 ~169 nHg		群 ~189 ·Hg	190-	群 ~209 Hg	21	群 0~ ·Hg	ij	†	E	常
		例数	%	例数	%	例数	96	例数	%	例数	%	例数	%
蹄	~150	15	17.0	9	20.9	5	21.7	4	22.2	33	21.6	130	43.2
係	151~300	71	80.7	32	74.4	17	73.9	14	77.8	134	79.5	171	56.8
長	301∼	2	2.3	2	4.7	1	4.3	0	0	5	2.9	0	0

表 10 最低血圧と角膜輪部毛細血管との関係

									AL (2)	щ / \	- / 110	C 780 F1	- C/141	ш	L 4.7	~ vi						
		1	助脈	脚巾	1			派 ル			顆	血流	状態	血流	速度		靜	脈	拡	張		蛇行
		~3	4~5	6~	8~	~7	8~ 10	11~ 12	13~ 15	16~	粒	靜止	断続	やや遅	遅	紡	分	不	分+ 紡	分+ 不	紡+ 不	
最高 血 圧 17090	数	10	6	0	0	6	6	1	1	2	9	5	7	6	9	3	1	3	3	0	1	0
以上の者	96	62.5	37.5	0.0	0.0	37.5	37.5	6.2	6.2	12.5	53.6	31.2	43.8	37.5	53.6	18.9	6.2	18.9	18.9	0.0	6.2	0
最 展 低 血 圧 170110	数	13	9	0	0	10	10	0	1	0	20	5	17	9	11	4	11	1	5	0	1	4
以上の者		59.1	40.9	0.0	0.0	45.4	45.4	0.0	4.5	0.0	90.9	22.7	77.3	40.9	50.0	18.2	50.0	4.5	22.7	0.0	4.5	18.2

紡…紡錘形拡張 分…分岐部三角形拡張 不…不規則拡張

表 11	ारीत	答	മ	卡	行

	I 群	%	1 群	%	皿 群	%	IV 群	%	計	96	正常	%
蛇 行	8	9.5	3	6.8	4	14.4	3	12.5	18	9.4	9	2.9

表 12 動脈の部分的狹小

	I	群	%	П	群	%	II	群	%	IV	群	%	計	96	正常	%
動脈の部分的液小		5	5.3	1		2.1	2		7.7	0		0.0	8	4.2	5	16

(ii) 出血

全例中2例(1.0%)に認めた。

そのうち、1例は75才女子で、6年前から高血圧症に罹患しているが、脳出血の既往はなく、現在最高血圧 186 mmHg. 最低血圧 80mmHg で Rumpel-Leede 現象陽性、動脈壁の硬化度は2度から3度、眼底所見では Keith-Wagner (以下 K.W. と書く)1度、Scheie (以下 S.と略す)の高血圧性変化、硬化性変化共に1度であつた。

他の1例は64才男子で,脳出血の既往はないが, 現在降圧剤を服用中で最高血圧 156 mmHg,最低血 圧 76 mmHg,Rumpel-Leede 現象弱陽性,動脈壁 の硬化度は2度で、眼底所見は K.W. 3度, S. の高血圧性、硬化性変化は共に2度であつた。この両者共に角膜輪部毛細血管の所見は、動、静脈脚巾はやや狭小、血流断続、顆粒の出現、蛇行、分岐部三角形拡張、紡錘型拡張を有し、動、静脈共に血液の充盈は過度であつた。又血流速度の遅延はあまりみられなかつた。(表13)

(iii) 静脈の部分的拡張

高血圧症例中75.0%にこれを認めた、静脈拡張を年令的にみると、40才代、50才代、60才代、70才以上と年令の高くなるに従つて、61.0%、73.7%、76.8%、78.3%と漸次増加する傾向を認めた、(表14)

麦	12	ж	-
24	1.5	m	र्ता

			1	7									
		I 群	96	II 群	96	11 群	96	IV 群	96	計	96	正常	96
出	血	1	1.1	0	0.0	1	3.8	0	0.0	2	1.0	0	0.0

表 14 靜脈拡張と年令との関係

	年 令	l	29	30	~39	40	~49	50-	~59	60-	~69	70)~
	人数	2	96	4	96	18	96	46	96	43	96	74	96
靜	紡	1	50.0	1	25.0	1	5.5	15	32.6	16	37.2	17	22.9
	分	0	0.0	1	25.0	3	16.7	7	15.2	10	23.3	21	28.3
脈	不	0	0.0	0	0.0	6	33.3	3	6.5	2	4.7	6	8.1
拡	紡+分	0	0.0	1	25.0	1	5.5	6	13.0	4	9.3	10	13.5
張	不+分	1	50.0	0	0.0	0	0.0	1	2.1	1	2.3	4	5.5
尔	不+紡	0	0.0	0	0.0	0	0.0	2	4.3	0	0.0	0	0.0
	計	2	100	3	75.0	11	61.0	34	73.7	33	76.8	58	78.3

紡···紡錘形拡張 分···分岐部三角形拡張 不···不規則拡張 ·

最高血圧との関係では I 群から II , III , IV群と最高血圧の高くなるに従つて64.7% , 86.0% , 82.5% , 88.8%と漸次増加する傾向にあつた. (表15)

又最低血圧との関係では最高血圧 170 mmHg 以

上で最低血圧 90 mm Hg 以下のものと、最低血圧 110 mm Hg 以上のものについてみると前者では68.7 %に静脈拡張を認め、後者では100 %にこれを認めた。(表10)

表 15 靜 脈 拡 張

		I	群	П	群	Ш	群	IV	群	総	計
		数	96	数	%	数	96	数	96	数	96
靜	紡	21	23.9	14	32.5	7	30.4	5	27.7	47	27.5
	分	18	20.4	9	20.9	6	26.1	6	33.3	39	22.8
脈	不	12	13.6	4	9.3	2	8.7	1	5.6	19	11.1
拡	紡+分	3	3.4	7	16.0	4	17.5	3	16.6	17	9.9
張	不+分	3	3.4	2	4.6	0	0.0	1	5.6	6	3.5
ZIX.	不+紡	0	0.0	1	2.3	0	0.0	0	0.0	1	0.6
	計	57	64.7	37	86.0	19	82.5	16	88.8	129	75.0

紡…紡錘形拡張 分…分岐部三角形拡張 不…不規則拡張

これら拡張を形態的に分岐部三角形拡張, 紡錘形拡張, その他不規則拡張の3型に分類して観察すると, 不規則拡張は全拡張例中, 10%前後を占め, 他は全て分岐部三角形拡張及び紡錘形拡張であつた. (表15)

次にこれら分岐部三角形拡張, 紡錘形拡張, 不規則拡張の3種類の拡張と年令との関係をみると, 不規則拡張は40才代, 50才代, 60才代, 70才以上では, 33.3%, 6.5%, 4.7%, 8.1%と年令の進むに従つて減少し分岐部三角形拡張は16.7%, 15.2%, 23.3%, 28.3%と年令の進むに従つて漸次増加する傾向がみられた. (表14)

又この三種類の拡張と最高血圧との関係をみると、不規則拡張は I 群から II, III, IV群と最高血圧の高くなるに従つて13.6%, 9.3%, 8.7%, 5.6%と次第に減少し、分岐部三角形拡張は20.4%, 20.9%, 26.1%, 33.3%と漸次多くなる傾向がみられ、紡錘形拡張は最高血圧の上昇にかかわらず23.9%, 32.5%, 30.4%, 27.7%と大体30%前後の値を示していた。又紡錘形拡張と分岐部三角形拡張を同時に有するものは、 I, II, II, IV 群と最高血圧の高くなるに従つて3.4%, 16.0%, 17.5%, 16.6%の値を示した。(表15)

次に最低血圧との関係では、最高血圧 170 mmHg 以上で最低血圧 90 mmHg 以下のものと、最低血 圧 110 mmHg 以上のものについてみると、分岐部 三角形拡張が前者には1例(6.2%)に対し後者は 11例(50.0%)で最低血圧の高いものに分岐部三角 形拡張が多い、又不規則拡張は前者に 3 例(18.9%) に比し、後者では 1 例 (4.5%) で最低血圧の低い ものの方に多い傾向がみられた。(表10)

次に高血圧症例中, 紡錘形拡張, 分岐部三角形拡張を各々単独に有するもの66例について動脈脚巾と蛇行の有無について検討してみると, 動脈脚巾は3 μ 迄のものが分岐部三角形拡張例では14例 (42.4%)あり, 紡錘形拡張例では16例 (48.5%)で両者に有意の差は認められなかつたが, 蛇行は分岐部三角形拡張例に7例 (21.2%), 紡錘形拡張例に2例(6.0%)で前者に多く認められた, (表16)

7) 血流状態

血流断続を認めるもの67例 (39.2%),血流静止を 認めるもの14例 (8.2%) を認めた、又この断続, 静止と年令との関係をみると、30才代以上年令の高 くなるに従つて、断続静止併せて、25.0%, 20.0%, 27.5%, 61.5%, 60.9%と高率にあらわれ、特に60 才以上では急激な増加を認めた。(表17)

又血流断続,静止と最高血圧との関係をみると最高血圧の上昇と共に32.9%,48.9%,73.9%,77.8 %と漸次高率に現われている.(表18)

次に最低血圧との関係をみると、表10の如く最低 血圧の 90 mmHg 以下のものに断続、静止併せて 75.0%に比し、最低血圧 110 mmHg 以上のもので は100%にこれを認めた。

8) 血流速度

高血圧症例中80.7%に遅延をみ、正常なものは 19.8%に認めたにすぎない、血流速度の遅延をみた

			分	岐	部	Ξ	角	形	拡	張			 紡	錘	7	E	拡	3.	Ž
		I	群	п	群	M	群	IV	群	計(%)	I	群	I	群	ш	群	IV	群	計(%)
動力	3μ迄	2	2		5	4	1		3	14(42.4)		9		2	4	1		L	16(48.5)
動脈	3~5 μ	٩	9	4	ļ	1	l		1	15(45.4)		4		7	2	2] ;	l	14(42.4)
脚	5~7μ	4	1	()	()		0	4(12.1)		3	,	0	()	()	3(9.1)
ф	7μ以上	()	()	()	'	0	0(0.0)		0		0	()	()	0(0.0)
蛇	行	:	3	1	L	2	2	:	1	7(21.2)		1		0	1	L	()	2(6.0)

表 16 拡張の種類と動脈脚巾及び蛇行

表 17 血流状態と年令との関係

年 令	~	29	30~	~39	40~	-49	50~	~59	60~	~69	70	~
人数	2	(%)	4	(%)	10	(%)	40	(%)	39	(%)	69	(%)
血流靜止	0	0.0	0	0.0	0	0.0	2	5.0	8	20.5	4	5.8
状 断続	0	0.0	1	25.0	2	20.0	9	22.5	16	41.0	38	55.1

	I	群	п	群	Ш	群	IV	群	카		Œ	常
血流状	26	29.5	19	(%) 44.2	12	(%) 52.2	10	(%) 55.6	67	(%) 39.2	23	(%) 8.0
態靜止	3	3.4	2	4.7	5	21.7	4	22.2	14	8.2	0	0.0

表 18 血流状態と最高血圧との関係

表 19 血流速度と年令との関係

年	令	~2	9	30~	·39	40~	49	50~	-59	60~	-69	70	~
$\overline{\mathbf{x}}$	数	2	(%)	. 4	(%)	10	(%)	40	(%)	39	(%)	69	(%)
THE !	ラ キ ラ	1	50.0	2	50.0	7	70.0	22	55.0	17	43.6	21	30.4
速度	遅	0	0.0	0	0.0	1	10.0	5	12.5	19	48.7	43	62.3

表 20 血流速度と最高血圧との関係

	I	群	II	群	Ш	群	IV	群	計		正	常
血を運	40	(%) 45.5	14	(%) 32.6	7	(%) 30.4	9	50.0	70	40.9	14	(%) 4.8
度遅	24	27.3	21	48.8	15	65.2	8	44.4	68	39.8	1	0.3

もののうち、比較的軽度なやや遅のものと、遅のものとに分けて、これと年令との関係をみると、40才代、50才代、60才代、70才以上と年令の高くなるに従つて70.0%、55.0%、43.6%、30.4%とやや遅のものは年令と共に減じて来る傾にあり、遅のものは逆に10.0%、12.5%、48.7%、62.3%と漸次増加する傾向がみられた。(表19)

又これらと最高血圧との関係を観察すると、最高血圧がI, II, III, IV群と進むに従つてやや遅のものは45.5%、32.6%、30.4%、50.0%であり、遅のものは27.3%、48.8%、65.2%、44.4%で遅のものは最高血圧の高くなるに従つて増加する傾向にあつた。(表20)

又最低血圧との関係についても検討したが表10の 如く有意の差は認められなかつた。

9) 流血中の顆粒

97例 (56.7%) にこれを認めた。この顆粒の出現は年令の高くなるに従つて40才代,50才代,60才代,70才以上では各々16.7%,43.6%,58.1%,63.5%と顕著に増加して居る。又最高血圧との関係では、最高血圧が I, II, III, IV群と上昇するに従つて44.3%,60.5%,73.9%,83.3%と漸次高率に現われて来ている。(表21,表22)

又最低血圧との関係では表10の如くに、最低血圧 90 mmHg 以下のものには53.6%、最低血圧 110 mmHg 以上のものでは90.9%と最低血圧の高いものに高率に認められた。

10) 血液の充盈状態

充血を示すもの3例 (1.5%) を認めた、このうち2例は局所に出血を認めた75才女子と64才男子の

表 21 流血中の顆粒と年令との関係

年 令	~	29	30~	-39	40~	-49	50~	-59	60~	-69	70	~
人数	2	(%)	4	(%)	18	(%)	46	(%)	43	(%)	74	(%)
顆 粒	1	50.0	1	25. 0	3	16.7	20	43.6	25	58.1	47	63.5

表 22 流血中の顆粒と最高血圧との関係

		I	群	%	П	群	%	П	群	%	IV	群	96	計	%	正常	%
顆	粒	3	9	44.3	2	:6	60.5	1	7	73.9	1	5	83.3	97	56.7	52	17

例で、他の1例は35才男子で最高血圧 178 mmHg, 最低血圧 98 mmHg で眼底所見は、K.W.1度, S.の高血圧性,硬化性変化共に1度で局所的には分 岐部三角形拡張及び紡錘形拡張を伴つており、動、 静脈巾は共にやや拡大している例であつた。

又鬱血を認めたものは6例(3.7%)にあつた。

この 6 例中全例において静脈は全体的に一様に拡張の傾向にあり、そのうち 2 例は特に無緊張性に拡張し、静脈巾が $20\sim30~\mu$ に及ぶ部分を認めた、

次に虚血像を示すものは全例中1例も認めなかつ た。(表23)

表 23 血 液 の 充 盈 状 態

		I 群	%	II A	%	III 群	%	IV 群	%	計	%	正常	%
	ш	3	3.2	3	6.3	0	0	0	0.0	6	3.7	9	2.6
充	ш	1	1.1	1	2.1	1	3.8	0	0.0	3	1.5	2	0.6
虚	Ú	0	0.0	0	0.0	′0	0.0	0	0.0	0	0.0	7	3. 2

11) 眼底所見との比較

(i) 眼底の動脈狭小例の角膜輪部毛細管所見

眼底血管の動脈対静脈の比が1:2, 1:3と明らかに動脈狭小を認める18例について角膜輪部毛細血管を観察した結果は、動脈中は 3μ 迄のもの8 例 (44.3%) で眼底に動脈狭小のない他の大部分の例に比し僅かに高率であつた。静脈脚中については $11\sim12\mu$ のもの又 $13\sim15\mu$ のもの併せて38.8%あり、他の高血圧症例よりも正常値のものが多い結果を得た。瞬係巾、瞬係長その他に有意の差を認めないが静脈拡張、特に紡錘形拡張を9 例 (50.0%) に認めた。(表24)

(ii) 眼底動脈の内径不同の有無と角膜輸 部毛 細血管との関係

眼底所見で明らかに内径不同の認められる40例と 内径不動の全く認められない38例について検討した 結果,動脈脚巾 3μ までのものは内径不同の認め られるものに21例 (52.5%),認められないものでは 14例 (36.8%) であり, $4\sim5\mu$ のものは前者に14例 (35.0%),後者に19例 (50.0%) で,内径不同の 認められるものに狭小なものが多い.

静脈脚巾についても 7μ 迄のもの及び $8\sim10\mu$ のものが内径不同の認められるものでは82.5%であるのに比し,認められないものには55.2%で,認められる例に狭小なものが多い。又歸係巾,歸係長には有意の差を認めないが,顆粒は内径不同の認められるものに65.0%,認められないものに50.0%で認められるものにやや多い結果を得た。

血流断続では前者に断続,静止併せて60.0%,後 者に34.2%と内径不同の認められるものに血流断続 の多い結果を認めた.

血流速度については有意の差を認めなく、静脈拡張については、分岐部三角形拡張は前者に22.5%、

表24 眼底所見と角膜輪部毛細血管像

	表24 眼底所	見と用膜幅部 日	本川官
		動脈俠小(+) のもの
.		数	%
動	~ 3	8	44.4
脈	4~ 5	6	33.3
脚	6~ 7	4	22.2
巾	8~	0	0.0
#75	~ 7	3	16.7
靜	8~ 10	8	44.4
脈	11~ 12	1	5.5
脚	13~ 15	6	33.3
ďμ	16~	0	0.0
蹄	~ 30	3	16.7
1	31~ 60	15	83.3
係	61~ 80	0	0.0
巾	81~	0	0.0
蹄	~150	5	27.8
係	151~300	13	72.2
長	301~	0	0.0
顆	粒	11	61.1
血状	靜 止	0	0.0
流態	断 続	4	22.2
血速	やや遅	5	27.8
流度	遅	7	38.9
靜	 紡	9	50.0
脈	分	4	22.2
拡	不	3	16.7
張	紡 + 分	0	0.0
蛇	行	1	5.5
		i .	

紡…紡錘形拡張 不…不規則拡張

分…分岐部三角形拡張

後者に13.2%で内径不同のあるものに多く,不規則 拡張は前者に16.0%,後者に23.7%で内径不同の認 められないものにやや多く認められた.(表25)

(iii) 血管反射増強の有無と角膜輪部 毛細血管像

眼底血管の反射増強の明らかに認められるもの25 例と全く認められないもの20例を選んでその角膜輸 部毛細血管所見を比較検討した。その結果、動脈脚 巾は 3μ 迄の もの は反射増強の認められるものに

表25 眼底動脈の内径不同と角膜輪部毛細 血管像

		内径不	同(+)	内径不	同(一)
	数字はμ	数	%	数	%_
	~ 3	21	52.5	14	36.8
動脈脚巾	4~ 5	14	35.0	19	50.0
and Mc wat its	6∼ 7	4	10.0	5	13.2
	8~	1	2.5	0	0
	~ 7	14	35.0	9	23.7
	8~ 10	19	47.5	12	31.5
靜脈脚巾	11~ 12	2	5.0	6	15.8
	13~ 15	3	7.5	9	23.7
	16~	2	5.0	2	5.3
	~ 30	8	20.0	8	21.1
蹄係巾	31~ 60	29	72.5	24	63.1
11 150 No.	61~ 80	3	7.5	4	10.5
	81~	0	0.0	2	5.3
	~150	9	22.5	2	7.2
蹄係長	151~300	30	75.0	26	92.8
	301∼	1	2.5	. 0	0.0
顆	粒	26	65.0	19	50.0
	一静 止	7	17.5	4	10.5
血流状態	断 続	17	42.5	9	23.7
4 14 14 -4	やや遅	17	42.5	22	57.9
血流速度	遅	12	30.0	9	23.7
	紡	9	22.5	8	21.1
	分	9	22.5	5	13.2
靜脈拡張	不	4	16.0	9	23.7
nf DIN 344.71区	紡+分	5	12.5	4	10.5
	不 + 分	1	2.5	2	5.3
	不 + 紡	1	2.5	0	0.0
蛇	 行	4	10.0	2	5.3

紡…紡錘形拡張 不…不規則拡張 分…分岐部三角形拡張

13例 (52.0%), 認められないものに 6 例 (30.0%) で明らかに反射増強の認められるものに狭小なものが多い.

静脈脚巾については 10μ 迄のものは前者に80.0 %後者に50.0%で反射増強の認められるものに狭小なものが多い。特に 7μ 迄の狭小なものが反射増強を有するものにおいては40.0%と,反射増強の認められない例の15.0%に比し高率であった。

蹄係巾, 蹄係長, 流血中の顆粒, 血流速度等にお

表26 眼底血管の反射増強の有無と角膜輪 部毛細血管像

		血管反		血管反 (-	射増強-)
		数	%	数	%
	~ 3	13	52.0	6	30.0
451 NE 840 -1-	4~ 5	8	32.0	11	55.0
動脈脚巾	6 ∼ 7	4	16.0	3	15.0
	8~	0	0.0	0	0.0
-	~ 7	10	40.0	3	15.0
	8~ 10	10	40.0	7	35.0
靜脈脚巾	11~ 12	2	8.0	3	15.0
	13~ 15	3	12.0	5	25.0
	16~	0	0.0	2	10.0
	~ 30	6	24.0	5	25.0
not tot ale	31~ 60	17	68.0	13	65.0
蹄係巾	61~ 80	2	8.0	1	5.0
	81~	0	0.0	1	5.0
	~150	2	8.0	3	15.0
蹄係長	151~300	22	88.0	17	85.0
	301~	1	4.0	0	0.0
顆	粒	12	48.0	10	50.0
طهرال باد د.	静止	6	24.0	1	5.0
血流状態	断続	10	40.0	2	10.0
	やや遅	11	44.0	9	45.0
血流速度	遅	7	28.0	5	25.0
	紡	8	32.0	3	15.0
	分	5	20.0	3	15.0
靜脈拡張	不	0	0.0	2	10.0
PHY DIK DATE	紡 + 分	3	12.0	2	10.0
	不 + 分	2	8.0	2	10.0
	不 + 紡	0	0.0	0	0.0
蛇	行	3	12.0	2	10.0

紡…紡錘形拡張 不…不規則拡張 分…分歧部三角形拡張

いては,有意の差を認めなかつた.

血流の断続,静止については前者に64.0%,後者に 15.0%で反射増強の認められるものに高率であつた.

又静脈拡張のうち、紡錘形拡張は前者に32.0%、後者に15.0%で、反射増強の認められるものに高率に認められた。不規則拡張は反射増強の認められるものには全くなく、反射増強のないものに10.0%に認めた。(表26)

(iv) 静脈拡張の有無と眼底所見

角膜輪部毛細血管に静脈拡張を有するものと拡張 のないものとについて眼底所見を検討した結果、拡 張のないものにおいては K.W. 0度のもの36.5% 1度のもの45.4%, 2.3度のもの各々9.0%, であつ たが、拡張を有するものにおいては0度のもの22.0 %で拡張のないものに比し少なく, 1度40.9%, 2 度23.7%, 3度13.4%と2,3度のものが拡張のない 例に比し高率であつた. 又 S. の分類についてみて も高血圧性変化においては K.W. の分類における と同様に拡張の有るものは無いものに比し0度が少 なく, 2度, 3度のものが多い傾向にあつた.S. の硬化性変化については、この傾向は特に顕著で拡 . 張のないものについては0度は36.3%, 1度50.0%, 2度13.6%, 3度, 4度は0に対し, 拡張を有する ものは0度が17.0%で前者よりも少なく、2度を示 すものは逆に39.8%と高率を示しており、3度のも のも5.7%に認められた。(表27)

表27 靜脈拡張の有無と眼底所見

		拡張(-) 例	%	拡張(+) 例	%
K. W.	0	8	36.5	28	22.0
	1	10	45.4	52	40.9
	2	2	9.0	30	23.7
	3	2	9.0	17	13.4
	4	0		0	
Scheie, Hyp.	0	10	45.4	27	22.3
	1	9	40.9	46	38.0
	2	1	4.5	29	23.9
	3	2	9.0	19	15.7
	4	0		0	
Scheie, Scl.	0	8	36.3	21	17.0
	1	11	50.0	46	39.4
	2	3	13.6	49	39.8
	3	0	0.0	7	5.7
	4	0	0.0	0	0.0

(v) 静脈拡張の種類と眼底所見

紡錘形拡張と分岐部三角形拡張を各々単独に有する56例について眼底所見を検討してみると、紡錘形拡張を有する28例においては K.W., S. の分類共に2度のものが最も高率を占めているのに比し、分岐部三角形拡張を有する28例においては K.W., S.

表28 静脈拡張の種類と眼底所見

- 12.00	, ,	נ אנע אועו דנו	及り住民	K C 1948	10100	
		紺	j錘形拡	張を有	するも	Ø
		I群	II群	Ⅲ群	IV群	計
K. W.	0	2	1	0	0	3
	1	4	3	1	1	9
	2	5	3	2	1	11
	3	3	1	2	0	6
	4	0	0	0	0	0
Scheie, Hyp.	0	3	1	1	1	6
	1	5	2	0	0	7
	2	5	3	2	1	11
	3	1	1	2	0	4
	4	0	0	0	0	0
Scheie, Scl.	0	2	1	0	0	3
	1	3	2	2	1	8
	2	7	3	3	1	14
	3	2	1	0	0	3
	4	0	0	0	0	0
計		14	7	5	2	28

		分岐台	8三角形	 ジ拡張を	有する	もの
		I群	II群	Ⅲ群	IV群	計
K, W.	0	4	1	0	0	5
	1	6	3	0	1	10
	2	1	2	2	2	7
	3	3	1	2	0	6
	4	0	0	0	0	0
Scheie, Hyp.	0	3	1	0	0	4
	1	6	2	0	2	10
	2	2	2	2	1	7
	3	3	2	2	0	7
	4	0	0	0	0	0
Scheie, Scl.	0	4	1	0	0	5
	1	8	2	1	1	12
	2	2	4	. 3	2	11
	3	0	0	0	0	0
	4	0	0	0	0	0
計		14	7	4	3	28

共に1度のものが最も多い、又紡錘形拡張を有するものには28例中3例に8.の硬化性変化の3度を認めたが、分岐部三角形拡張を有するものに於いては28例中1例も8.の硬化性変化3度のものは認めなかった、又紡錘形拡張を有するものの,眼底について最高血圧との関係を検討したが、有意の差は認められなかつた、又分岐部三角形拡張を有するものに就いても同様の検討を加えた結果、I群においては眼底所見の0度、1度のものが圧倒的に多く、II,II,IV群には2度、3度のものが多くなつて来る傾向にあった.(表28)

12) 季節的変化の及ぼす影響について

8月(室温 21°C) 10月(室温 19°C) 12月(空温6°C) の3回にわたり同一症例9例について観察した結果は、寒冷により動脈脚巾は9例中7例(77.8%)に狭小を認めた、他は不変1例,拡大せるもの1例があつた。

静脈脚巾においては狭小を示すものは3例(33.3 %)で、かえつて拡張を示すものが5例(55.6%) で最も多く,不変は1例であつた。静脈脚巾につい ては健康例に比し狭小化するものが少なく、健康例 にはみられなかつた拡張が55.6%に現われている。 次に歸係巾については狭小を示すもの4例(44.4 86) 拡大を示すもの1例,他の4例(44.4%)は不 変であつた、又蹄係長については9例中8例(88.9 %) に短縮をみ,不変は無く,延長したもの1例を 認めた、血流断続については、出現及び増強を認め たもの4例(44.4%),不変3例(33.3%),1例に軽 減を認めた、又不変の3例は初回から断続を有して おり、断続のないまま不変のものは1例もみられな かつた。又血流速度は9例中8例(88.9%)に遅延 をみ、1例は不変であり、速度の早くなつたものは 1例も認めなかつた、次に流血中の顆粒は、9例中 3例(33.3%) に出現をみ、6例が不変であつた。 この不変の例はいずれも初回から顆粒を有しており, 顆粒を認めないものは寒冷下では1例もみられなか つた. 次に分岐部三角形拡張及び紡錘形拡張につい ては出現, 増強を認めたもの各々6例(66.7%), 5 例(55.6%)であり,他は不変で消失した例は1例 も無かつた。(表29, 表30)

総括並びに考按

高血圧症患者の角膜輪部毛細血管像を,第1報において検討した健康者のそれと対比して考察を加えると

	政	12 月	1		ł	$110 \sim 150$	140	8	150	110	20	
	*	月 1	200	_	_		8	200	200	90		延長1
	, .	10	750~	250	150	150	120~	90~200	120~	180∼	140	
	裁	町	200~300 120~200	50~110	250~300		125~250 120~200	250	200~300 120~200	150~200 180~200	200~300	短縮8,
		∞	<u>8</u>	20	220		125		8	120	8	
		刑	()	+			+	+			+	
	ı ı (μ)	<u>罪</u> ——	_									拡大1
	L	町	1	!	ı	20~40	Į	8	30~20	9	30	1
鰰		12				8			8			4,
赊	迷	町	50~100	$30\sim 50$	$60 \sim 80$	30	$20 \sim 40$	$30 \sim 50$	30~20	$30 \sim 60$	40~50	不幾
₩		10			ĝ		ଛ					
Æ	挺	町	50~80	$50 \sim 70$	08~09	ı	40~60	06~09	40~60	40~60	40~60	被小4, 不变4,
双		∞	-20	2	8		\$	9	4	4	- 40	224
6	u)	地流	Ĵ	$\widehat{\underline{}}$	$\widehat{\underline{}}$		$\widehat{}$	+	+	$\widehat{}$	+	
#	(4) th			_								拡張 5
季節的変化の及ぼす影		12 月	1	1	1	$10 \sim 12$	$15 \sim 17$	10	$8 \sim 12$	$15 \sim 20$	$9 \sim 12$	
遍	盘			2	9			ıvi	~			不斃 1,
₩	震	10 月	10~18	$15 \sim 20$	$11{\sim}16$	12	$11{\sim}12$	$10 \sim 15$	$10{\sim}12$	$8{\sim}12$	8~12	
53	離	A	10~15	13~18	10~12	1	11~12	10~15	10~12	7~10	10~15	狭小3,
表		œ	10	13	င်	'	11	င်	ģ	۲,	50	教
		识	(-)	+	+	_		_	_		т	
	€	昇	<u>ٺ</u>	T	Т	+	+	+	+		+	1914
	문	用	1	1		3~5	~3	3~5	3~5	2	23	拡張
	展	12			_	ဗ်		က်	ဗ်			1,
		10 月	2	3~2	3~2	ß	3~2	2~2	5(10)	ß	ro	不变1,
	崇	01		<u>ო</u>	m)		m m	ن	ດັ			
	(A)	8 月	3~5	2	$2\sim$	i	$3\sim$ 5	2~2	ഹ	ß	2~1	被小7 ,
		.,			4-5		1able	ــــــــــــــــــــــــــــــــــــــ	-		111	
	*	74	=	Η	+€	Ħ	蓬	平	크	華	₩	_
	E	.)	华	**	뙶	弁	£	址	田	堂	guz.

	I	
	ı	
*		
那	_	
₩	-	
₩		
岌		
6		
¥		
亥		
Æ		
塩		
₩		
8		
张		
	ļ	

日 第 章 第 日	続		■		流	選	₩	24	羅	女		\$	分岐部三	角形拡張	mb4 :	貎	錘	形	張
8月 10月 12月 判定 8月	当	<u>. </u>	8月		10月	12月	可定	8.月	10.A	12月	単紀	8月	10月	12月	地定	8月	10月	12月	判定
		변	띰		おや連	ı	+	(±)	(+)	- - -		1	(+)	1	+	(-)	(-)	1	
	<u> </u>	•	띰.		中や福	!	+	£	÷	ļ		(+)	(+)	1		(+	$\widehat{\pm}$		+
五 + 一 (+) (+)	+		띰		やや	l	+	Ĥ	(+)	1	+	Ĥ	(+)	1	+	Ĵ	<u>-</u>	l	
(+) (+)					やや運	やや運		ı	(+)	(+)		1	÷	÷		1	<u>-</u>	<u>-</u>	
(十)(十)(十)		H	当		坦	事の事	+	÷	(+)	(±		÷	£	(+)		(-)	(+)	(+)	+
(+) (+) + やや瀬	+ やや瀬	やや選	や選		やや遅	×	+	(+	(+)	£	+	Œ	(+)	÷	+	$\widehat{\mathbf{L}}$	1	(-)	
_	+		범		迪	取るみ	+	(+	(+	(+		Ĵ	÷	÷	+	Ĵ	(+)	(+)	+
(土) (土) (十) 十 正	+		H		닖	やや運	+	(+)	(+	(+		Ĵ	(+	(+	+	(-)	Ĵ	(+)	+
(+)	H —				をや理	理やや運	+	(+)	(†	(+)	+	Ĵ	(†	(†	+	<u>-</u>	÷	(+)	+
出現4, 不変3, 軽減1 運延8	奖3, 軽減1		湿延 8	w	遅延8, 不变	<u>ت</u> 1		出現	出现3, 不变6	9 3		出現1	出現增強6,	不效3		出現	出現增強 5, 不変		4

1) 動脈脚巾

 3μ 迄のものが38.7%, $4~5\mu$ のもの49.7%で, 5μ 以下が大部分を占め,健康者において $6~7\mu$ のものが最も多いのに比較して狭小である。又年令別では30才代において $6~7\mu$ のものが50.0%を占め,比較的健康者のそれに近いが,年令の増加に伴い次第に狭小となり,60才代では 3μ までのものが60.5%に達しており,年令の増加に伴い狭小となる傾向が強い。このことは健康者におけるよりも更に著しい。次に高血圧の程度との関係では,最高血圧の上昇に伴い狭小となる傾向が強いが,最低血圧との関係は明らかでなかつた。

27 静脈脚巾

 7μ 迄のもの19.3%、8~10 μ のもの52.0%で、10 μ 以下が大部分を占め、健康者において 11~15 μ が最も多いのに比較して狭小である。特に健康者では 13~15 μ のものが69.1%であるのに対し、高血圧者では 13~15 μ のものは 11.7%であるに過ぎない。又年令別では年令の増加と共に狭小となり、殊に60才以上では 11~15 μ のものは5.1%、 7μ までのもの89.8%を占め、著しく狭小で、健康者におけるよりも更に著しい。次に高血圧の程度との関係では最高、最低血圧ともにその増加に伴い狭小の傾向がみとめられた。

3) 蹄係巾

31~60 µ のものが71.9%を占め、健康者のそれと略々同一で、年令との関係並びに血圧による変動等には有意の相関性がえられなかつた。

4) 蹄係長

151~300 u のもの79.5 %で、健康者のそれと略々同一で、年令との関係並びに血圧による変動等には有意の相関性がえられなかつた。

5) 血管の走行

大多数は直行しており、健康者と大差がなかつた。 血圧との間にも相関性を認めなかつた。

6) 局所的変化

動脈の部分的狭小を認めるものは極く少ないが2例(1.0%)において出血を認めたことは注目される. これらの症例は75才と64才の者で,いづれもRumpel-Leede 現象陽性であるが,動脈壁の性状,眼底所見等とは必ずしも有意所見を認め難く,他の角膜輪部毛細血管所見では動,静脈脚巾がやや狭小,血流断続,顆粒の出現,蛇行,分岐部三角形拡張,紡錘形拡張を有し,動,静脈共に血流の充盈は過度であつた.静脈脚では部分的拡張を認める場合が多く,75.0 %で、年令と共にその陽性率は増加する。その頻度は 健康者に比し高率である。又血圧との相関性が強い。 更にこれらの拡張を形態的に分類すると,不規則拡張の10.0%を除けば他はすべて分岐部三角形拡張及 び紡錘形拡張であつた。年令的には不規則拡張は年 令の進むに従つて減少し,分岐部三角形拡張は反対 に増加し,紡錘形拡張は不定であつた。又血圧との 関係では最高,最低血圧とも不規則拡張の頻度と反 比例し,分岐部三角形拡張の頻度とは正比例し,紡 錘形拡張では不定であつた。

処で健康者の観察では、分岐部三角形拡張、紡錘 形拡張は共に年令の進むにつれて増加を認め、老化 的変化が加味された結果を考えており、従つて高血 圧症患者での両変化は更に高血圧因子が加重されて の結果と考えるべきであろう。

7) 血流状態

血流断続39.2%, 血流静止8.2%, 健康者における血流断続8.0%に比し高率である. 而も年令と共に増加し, 特に60才代では61.5%を示した. 又最高, 最低血圧の程度と著しい相関関係がみられた.

8) 血流速度

80.7%に遅延を認め、その頻度は年令と共に増加する、健康者では第1報の如く殆んど正常値に属するから、高血圧症患者では特異的とみなされ、最高血圧の上昇につれ、その程度は高かつた。

9) 流血中の顆粒

平均56.7%に認め、健康者の17.0%に比し多い. 又年令の増加と共に増加し、血圧との関係では最高、 最低血圧ともに上昇につれ出現率の増加を認めてい る。

10) 血液の充盈状態

充血を示すものは1.5%に過ぎなかつたがそのうち2例は前記の出血を認めた2例を含む。又鬱血を認めたものは3.7%であつた。これらの所見は健康者にも5.5%に認めているから、高血圧とは関係なく、機能的変化によるものと考えられる。

11) 眼底所見と角膜輪部毛細血管所見との比較

眼底動脈と角膜輪部毛細血管は共に内頸動脈より 分岐しているところから,眼底動脈の所見と角膜輪 部毛細血管の所見を対比してみると,眼底動脈狭小 の例には角膜輪部毛細血管の動脈脚巾の狭小なもの がやや多く,静脈脚巾はむしろ正常値を示すものが 多く,又静脈拡張,特に紡錘形拡張がやや多かつた。 又眼底助脈の内径が不同の例には角膜輪部毛細血管 の助脈脚巾,静脈脚巾の挟小なものが多く,顆粒形皮, 血流の断続、分岐部三角形拡張等も亦出現率が高かった。次に眼底血管の反射増強の明らかに認められた例では、動脈脚巾、静脈脚巾の狭小、血流の断続、静止、紡錘形拡張等の出現率が高かつた。又角膜輪部毛細血管において静脈拡張のあるものではKeithwagner の分類所見で2度、3度のものが多く、Scheie の分類所見でも略々同様の傾向を示した。

期くて眼底動脈に異常を認める場合には角膜輪部 毛細血管にも異常所見をみとめる場合が多く,これらは高血圧症にみとめる異常所見に一致する.即ち 眼底所見に認めるよりも,角膜輪部毛細血管においては更に詳細な観察所見が得られ,両者に関連の深いことを知りえた.

12) 季節的変化の及ぼす影響

同一症例につき気温の異る8,10,12月において観察すると、寒冷により動脈脚巾は狭小となり、静脈脚巾はかえつて拡張し、蹄係巾は狭小となるか、不変で、蹄係長は短縮し、血流断続は既に認めたものはそのままか、増強人は新に出現し、血流速度は遅延し、流血中の顆粒は全例にみられ、分岐部三角形拡張及び紡錘形拡張は出現、増強の傾向を認めた。

これを第1報で明らかにした健康者のそれと比較すると、殆んどの所見は同一であるが、静脈脚巾がかえつて拡張することと、静脈拡張が健康者では不変であるのに対し、本例では分岐部三角形拡張及び紡錘形拡張が出現、増強の傾向を示す点において異る.

従来高血圧症の指爪根部毛細血管の観察に就いては Müller O. & Hübener G., Weiss E., Lange F., Dentsch V.G. & Liepelt A., Groedel F. & Hubert G., Vanotti E., 乾, 山森, 辻, 中沢, 瀬越等多数の報告があるが, 動脈脚の狭小, 静脈脚は拡張, 屈曲し, 血流は緩徐で, 顆粒状を呈し, 持続的でない等の諸点が挙げられているが必ずしも一致していない。既に健康者においてのべた如く, 指爪根部毛細血管の所見は角膜輪部毛細血管の所見に比し動揺が大きく, 従つて明確な所見を得がたいことから, 諸家の所見も首肯されるが, 著者が得た以上の角膜輪部毛細血管の所見は可成りこれらの所見と一致しており, 更に動揺傾向が少ない.

従つて高血圧症においては角膜輪部毛細血管の観察は重要な意義を有することとなる.

結 論

高血圧症患者の角膜輪部毛細血管像を観察し、次の結果を得た。

- 1. 動脈脚巾は 3 μ 迄のものが 38.7%, 4~5 μ のもの49.7%で, 5 μ 以下が大部分を占め、狭小である。年令の進むにつれその傾向は強い。
- 2. 静脈脚巾は 7μ 迄のもの19.3%, $8\sim10\mu$ のもの52.0%で 10μ 以下が大部分を占め,狭小である。年令の進むにつれ,又最高,最低血圧の上昇につれその傾向は強い。
- 3. 瞬係巾, 瞬係長, 血管の走行等では健康者と 大差がなく, 年令, 血圧の程度等とは関係がない.
- 4. 極少数例ではあるが、出血を認め、診断上重要な所見と考えた。
- 5. 静脈脚では75.0%に部分的拡張を認め、それらの多くは分岐部三角形拡張及び紡錘形拡張で、分岐部三角形拡張は年令の進むにつれ、又最高、最低血圧の上昇につれ、その頻度を増した。これら静脈脚の部分的拡張は高血圧因子が加重された結果と考察した。
 - 6. 血流断続39.2%, 血流静止8.2%で健康者よ

り頻度が高く、特に年令の進むにつれ、又最高、最 低血圧の上昇につれ、その傾向が強い。

- 7. 80.7%, に血流速度の遅延を認め、年令のすすむにつれ、又最高血圧の上昇につれ、その頻度及び程度の増加をみとめた。
- 8. 流血中の顆粒を56.7%に認め、健康者のそれより遙かに高率であり、年令のすすむにつれ、又最高、最低血圧の上昇につれ、その頻度の増加を認めた。
- 9. 血液の充盈状態の異常は本症に特異的でない。
- 10. 眼底動脈と角膜輪部毛細血管を彼此対比して 検討すると,それぞれ密接な関係を有することが分 る
- 11. 寒冷による影響では、健康者のそれと大差はないが、静脈脚巾がかえつて拡張すること、分岐部三角形拡張及び紡錘形拡張が出現、増強の傾向を示す点において特徴的であつた。

参考文献

- 1) 加藤: 臨床眼科 12巻, 1号 (昭33), 68.
- 2) 菊田:眼科臨床医報 (昭31), 699.
- 3) 眼科臨床医報 (昭31), 1117; (昭32) 906, 381, 662.
- 4) 佐々木: 眼科臨床医報 (昭31) 330; (昭30)
- 5) 竹内他: 眼科臨床医報 (昭29) 431, 614, 814.
- 6) 杉浦:日本循環器学誌 15 (昭26), 10.
- 7) 富田·日本循環器学誌 15 (昭26), 25, 52, 193, 254, 256.
- Müller O.: Die Feinesten Blutgefäße des Menschen. Stuttgart. Ferdinand Euke, Stuttgart (1939).
- 9) 尼子:日本内科学会誌 30 (昭17), 511.
- 10) 山森:十全会誌 48 (昭18), 1010, 1047.

- 11) 杉本:体質医学研究所報告 4 (昭28), 369.
- 12) Lange F.; Dtsch. Arch. Klin. Med. 152 (1926), 302.
- 13) 中馬:日本循環器学誌 14 (昭25), 249.
- 14) 川本:日本循環器学誌 11 (昭22), 79.
- Weiss E.: Münch. Med. Wsch 63 (1916),
 925, 64: (1917) 609.
- Parrisins W. & Winterlin E: Dtsch. Arch.
 Klin. Med. 141 (1923), 243.
- 17) Groedel F. & Hubert G. : Klin. Med. 100 (1924), 61.
- 18) 竹内:京都医学会誌 28 (昭6), 565.
- 19) 乾:日本内分泌学会誌 13 (昭12), 1633.
- 20) 瀨越:岡山医学会誌 71 (昭34), 7219.
- 21) 庵谷: 岡山医学会誌 70 (昭33), 4585.

Biomicroscopic Studies on the Marginal Capillary Plexus of the Cornea

Report 2 Marginal capillary plexus of the cornea of hypertensive persons

 $\mathbf{B}\mathbf{y}$

Yasuko Suezawa

First Department of Internal Medicine. Okayama University, Medical School (Professor: Dr. Kiyowo Kosaka)

The marginal capillary plexus of cornea of the hypertensives was studied and the following results were obtained:

- 1. The width of arterial foot was 3μ or less for 38.7% and $4\sim 5\mu$ for 49.7% while it was less than 5μ for the majority. This width was narrower than that of healthy persons. There was a tendency that the width narrowed with the age and the progress of hypertension.
- 2. The width of venous foot was 7μ or less for 19.3% and $8\sim10\mu$ for 52.0% while it was less than 10μ for the majority. This width was also narrower than that of healthy persons. There was a tendency that the width increased with the age and the rise of systolic as well as diastolic blood pressure.
- 3. As for the width and length of capillary loop and the direction of blood vessels, they were not much different from healthy persons and these things had nothing to do with the age and blood pressure.
- 4. Hemorrhage was seen though in a very few cases, and it was regarded as an in important clue to diagnosing.
- 5. The partial dilatations of venous foot were found in 75.0% of them. Those dilatations were fusiform or spindle-shaped, the occurrence of the former increasing with the age and the rise of systolic as well as diastolic blood pressure. It seemed that the factors of hypertension were the cause of the partial dilatations.
- 6. The occurrence of the intermittence and stasis of blood flow was more frequent than in healthy persons, the former affecting 39.2% and the latter, 8.2% of them. The frequency of occurrence increased with the age and the rise of systolic as well as diastolic blood pressure.
- 7. The speed of blood flow was slower than normal for 80.7% of them, the abnormality and its ingravescence increasing with the age and the rise of systolic blood pressure.
- 8. The formation of granules in blood flow was found in 56.7% of them, the percentage of granules being much higher than that of healthy persons. The frequency of occurrence rose with the age and the rise of systolic as well diastolic blood pressure.
 - 9. The abnormality in blood volume was not characteristic in this case.
- 1°. The comparative study of the arteries of the eye ground and the marginal capillary plexus of cornea revealed the existence of a close inter-relationship between them.
- 11. The effect of the cold weather on them was not much different from that on healthy persons, but it increased the width of venous foot and raised the ocurrence and ingravescence of the fusiform and spindle-shaped dilatation.